

## 7月1日 年間第13主日

王上 19:16b,19~21 ガラ 5:1,13~18 ルカ 9:51~62

### 1. ルカ vv.51-56

主イエスが御自分の受難のために、エルサレムへと向かう決意を固められたときの二つの物語りが朗読されました。ルカ福音書はこれらの物語りを、紀元前9世紀の北イスラエルの預言者であったエリヤとエリシャの思い出と重ね合せて語っています。

イスラエルの神ヤーウエの預言者であったエリヤとその後継者エリシャの物語りは、カナンのパアル礼拝の北イスラエルへの侵入に対するヤーウエ宗教の戦いの物語りです。イエフ王の革命(王下9-10章)によって一旦終結したこの戦いは、当時のイスラエルにおける二つの世界観の戦い、すなわちヤーウエ宗教対パアル宗教の戦いでありました。

エクロンの神パアル・ゼブブの助けを求めようとしたアハズヤ王の使者の一群の前に姿を現したエリヤは、天からの火によって彼らを焼き滅ぼしたと伝えられています(王下1章)。エルサレムへ向かうイエスを歓迎しようとしなかったサマリアの人々も、天からの火によって焼き滅ぼされるべきだったのでしょうか。

vv.55-56 「イエスは振り向いて二人を戒められた。そして、一行は別の村に行った。」

神の裁きの日は将来に待つべきであって、今は主イエスは神の国のための受難に向かってまっしぐらに進んで行かねばなりません。そして弟子たちに求められていたのは、ひたすらその主に従って行くことでありました。

### 2. ルカ vv.57-62

ここには、神の国の福音のための献身者たちを招かれた主イエスの姿が物語られています。これらの譬え話は、元来どこにでも当てはめることの出来る一般的な教訓ではなくて、このときの主イエスの特別なエルサレム行き道を、共に歩むためのものであったに違いありません。その特別な緊迫感を保持したままで、ルカ福音書は初代教会の会衆に向かって、その時代における彼らの信仰の決断を迫る主の言葉として、この伝承を用いたのでした。

教会の宣教はすべての人々を対象にして進められ、いろいろな種類の人たちがミサには集まって来ていました。「人間をとる漁師」(マコ1:17)として召された教会の働き人たちには、その獲物を選択することは求められていませんでした。現在は招きの時代であって裁きの時代ではないからです。

しかしそれは、神の国は終末の裁きと共に来るのだという緊迫感を忘れても良いということではありませんでした。20世紀のキリスト教が意図的に退けて来た裁き主イエスの到来のメッセージを、私たちは再び聞くことによって21世紀の教会を造り上げて行かねばなりません。

ある人がエルサレムに向かうイエスに、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と

申しました。するとイエスは彼に、「人の子には枕する所もない」と警告されました。別の人は「わたしに従いなさい」と招かれたのに、先ず自分の父を葬りに行くことを優先させようとしたために、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」という鋭いイエスの答えを聞かされました。最後にルカ福音書は、預言者エリシャの召命の物語りを明らかに思い起こさせる第三の警え話を語っています。ここでの主イエスの言葉は、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」であります。

### 3. 王上

エリヤの後継者エリシャが預言者としての召しを受けたとき、エリシャは自分の家に帰って父母に別れの挨拶をしました。また同郷の人々のために別れの饗宴を催しました。この記憶はルカ福音書の主張と対立するのでしょうか。私たちはそう考えるべきではないと思います。むしろルカ福音書は表面上の行動のあれこれにではなくて、主に従う者の心構えや姿勢の純粹さについて訴えているのです。

主イエス・キリストに従って行くという信仰生活は、決して表面的な行動の形式の問題ではなくて、それよりもエリシャの示した預言者としての召しへの徹底した献身にこそ、学ばなければならないものなのです。ルカ福音書は今朝の二つの物語りをそのように読み、そのように理解することを私たちに求めているのです。

共にミサをささげる私たちは今朝も、「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」と記念唱を歌います。

「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来たるべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(1テサ 1:10)          アーメン、ハレルヤ。

## 7月8日 年間第14主日

イザ 66:10～14 ガラ 6:14～18 ルカ 10:1～20

### 1. イザ

私たちはこのイザヤ書の預言を、現代のキリスト教会に向けられた典礼刷新への期待の言葉として聞きたいと思います。現代の典礼刷新は第二バチカン公会議から生まれて、全世界の教会で進められるようになったものでありますが、その課題は既に過ぎ去ってしまったものではなくて、むしろこれから 21 世紀の教会を造り上げて行く私たち一同の課題なのだというふうに理解することが大切です。

イザ 56-66 章は、旧約のイスラエルが捕囚の地バビロンから帰還して、エルサレムの町と神殿を再建した紀元前 6 世紀初頭の頃の預言です。神の民イスラエルの再建は、エルサレム神殿の再建と典礼の刷新によって実現するという強い信念が、その預言全体を貫いています。vv.10,13 の「エルサレム」とは、神殿における典礼のことを指していて、「彼女のゆえに喜び躍れ、彼女を愛するすべての人よ」(v.10)、「彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り、豊かな乳房に養われ、喜びを得よ」(v.11) とは、再建のイスラエルがその典礼によって神の民として養われることを言っているのです。

このイザヤ書の預言が、現代のイスラエル共和国の人々の信仰の中に今なお根を下ろしていることを、中東和平の仲介者たらんとするアメリカもロシアも理解してはいないように思えます。

他方、ユダヤ教から分離する形で誕生したキリスト教会は、地上のエルサレムではなくて天上のエルサレム、神の国に希望を置く信仰によってその歩みを始めました。ですからこの同じイザヤ書の預言によって、私たちキリスト教会は神の国での礼拝の完成に向かって目を上げるのです。

v.13 「母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける。」

この慰めは神の国で完成するのです。私たちが地上のミサで受ける慰めは、この神の国の慰めの信仰による先取りに他なりません。

「(教会では) “現在” が “われわれの求める未来の国(神の国)” に向けられ、従属している。」(典礼憲章 2) 「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している。この天上の典礼は、旅人であるわれわれが目指す聖なる都、エルサレムにおいて行われており……」(典礼憲章 8)。

私たちにとっての典礼刷新は、“神の国の慰めを待望する神の民の” 典礼刷新でなければなりません。

### 2. ルカ

ルカ福音書は他の共観福音書と同じ十二弟子の派遣の物語り(9:1-6)とは別に、もう一つ七十二人の派遣の物語りをここに語っています。十二使徒から始まった宣教が、さらに多くの働き人たちによる宣教活動へと拡大されて行った有様を、読者に思い浮かべさせようとしたのかも知れません。

いずれにしてもそこで宣教された福音は、「神の国が近づいた」という福音でした。キリストの福音は神の国の福音です。私たちがいつも主日のミサで唱える信仰宣言の最後の部分は、「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのち(神の国の命)を信じます」であります。また感謝の典礼で唱える主の祈りでは、「み国が来ますように」と祈ります。

神の国はキリストの死と復活によって完成してしまったものではありません。またキリストの福音は地上に神の国を建設しようというようなものではありません。そうではなくて、神の国はまだこれから歴史の終末に到来するものなのです。ですから私たちのミサが、将来の神の国の慰めを待望し、信仰によってそれを先取りして味わうものであることを理解することが大切なのです。

教会はいろいろな活動をしています。それらの多くは現代の社会に必要なもの、役立っているものです。

v.20 「しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

ですから、「(ミサは) …… 卓越した聖なる行為であって、その効果においては、教会のいかなる活動も、同等の理由や程度でこれに匹敵するものはない」(典礼憲章 7) のです。

### 3. ガラ

“この世” と、“共にミサをささげる群である教会” とは、決定的な点で区別されていることを思い出しましょう。“この世” は神の怒りによって滅びるものなのです。

v.14 「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」

私たちの主日のミサで、会衆の唱和する主の祈りの後に、司祭が副文を唱えます。

「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを、待ち望んでいます。」

典礼刷新は、これから 21 世紀の教会を造り上げて行く私たち一同の課題なのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月15日 年間第15主日

申 30:10~14    コロ 1:15~20    ルカ 10:25~37

### 1. ルカ

今朝朗読されたルカ福音書の物語りは、マルコ福音書をかなり大胆に切り刻んで再編集することによって、独特のメッセージを教会に伝えようとしています。マコ12章の一連の物語りがルカ20章に再録されているのですが、その中のマコ12:28以下の部分が切り取られて、マコ10:17と結びつけられて、今朝の私たちの福音のテキストとなっています。さらにそこに登場するサマリア人の行動は、代下28:14-15の物語りと奇妙に一致します。恐らくこのテキストの中には、通常私たちが読み取る以上の多様なメッセージ群が秘められていると思われるのです。

先ず注目したいのはv.28です。私たちはこのイエスの言葉を、21世紀の初頭に立っている現代の教会への呼びかけとして受けとめたいと思います。私たちは御子の十字架の血によって贖われ、罪の赦しをいただいて教会に加えられました。しかし“救われた”ということはそこに安住すればよいものではなくて、“目標を目指してひたすら走る”ことなのだ、ルカ福音書はここで訴えているように思えます(フィリ3:10-14参照)。

多くの人々がこの物語りを、キリスト教の博愛主義や人道主義的理解の材料と理解して来た歴史があります。しかしこのテキストを正しく読むなら、v.28で「それを実行しなさい」と言われているのはv.27のことであって、v.30以下はその例示です。v.27から切り離してv.30以下の物語りだけを独り歩きさせてはならないのです。

### 2.

“隣人”という言葉は、現代ではかなり得て勝手に使われてきているのではないのでしょうか。例えば国際問題を語るときに、“アジアの隣人”などという言葉が使われます。しかし歴史を振り返って見ると、昨日の友は今日の敵であったりして、友好関係が成立していたりそれを期待出来そうなときにだけ、“隣人”という言葉が好んで用いられて来ました。敵対関係にいたり、また仮想敵国であるときには、その相手国は“隣人”とは呼ばれませんでした。

それに対して多くの人道主義者、博愛主義者、平和主義者にとっては、地球上のすべての国々、すべての人類が“隣人”でありました。しかしそれはいわば理想を表現しているものであって、決して歴史の現実を説明するものではなかったと思います。

それでは今朝朗読されたルカ福音書が、21世紀の初頭に立っている現代の教会に向かって語っている“隣人”とは何なのでしょう。

### 3. ルカ

v.36 「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

大切なことは、ルカ福音書は“隣人である”ではなくて“隣人になる”ことを「実行しなさい」(v.28)と語っているということです。

道の向こう側を歩いて行った祭司もレビ人も、追いはぎに襲われた人と同じユダヤ人でした。同国人であるということは隣人だということです。しかし彼らは隣人としての助けの手をさし伸べませんでした。隣人であることが実質化していなかった(中身がなかった)のです。

同じように、同胞である日本人や、また日本に滞在したり永住している外国人は、言葉の上では私たちの隣人であると言えるでしょう。しかし“周りの人は全部隣人”というような思想を宣伝するために、このルカ福音書のテキストは今朝のミサで朗読されたものではありません。そうではなくて、“隣人になる”ことを実行するようにと呼びかけているのです。

### 4. コロ

私たち教会は御子キリストの十字架の血によって贖われ、罪の赦しに与かっている共同体です。

「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」(1:13-14)

この共同体は御子によって支えられ、キリストの復活に与かる希望に生きています(3:1-4)。共にミサをささげる群であり、「御子はその体である教会の頭です」(v.18)と呼ばれる共同体の中でこそ、私たちは“隣人”という言葉の正しい意味で理解することが出来るのではないのでしょうか。形式的な隣人ではなくて、「同じ(神の国の)約束にあずかる者」(エフェ3:6 参照)である隣人が、共に典礼に参加しているからです。

「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」(典礼憲章 10)

そしてルカ福音書が語っている“隣人になる”とは、人々をこの典礼共同体の中へと招き入れることなのではないのでしょうか。

「事実、使徒的な働きは、すべての人が信仰と洗礼によって神の子となり、一つに集まって教会の中で神をたたえ、犠牲にあずかって主の晩さんをするようになることを目標としているからである。」(典礼憲章 10)

今朝のルカ福音書のテキストを通して主イエスは、21世紀の初頭に立っている私たち教会に向かって呼びかけておられます。「それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」(ルカ 10:28)

アーメン、ハレルヤ。

## 7月22日 年間第16主日

創 18:1～10 コロ 1:24～28 ルカ 10:38～42

### 1. 創

イスラエルの神ヤーウェがアブラハムと契約を結ばれ、彼の名がアブラムからアブラハムに、彼の妻の名がサライからサラに変えられて、神の救済史は新しい段階へと移ります。過去には考えられなかった新しい出来事が、神の御手によって起こされようとしていました。すでに百歳になろうとしているアブラハムとその年老いた妻に、子供が授かろうとしていました。

創世記の中のそんな場面に登場するマムシでのアブラハムへの神顕現の物語りを、今朝私たちは最初の朗読で聞きました。アブラハムのもてなした三人の人と主(ヤーウェ)とが同一のものとして描かれていることを理解することが大切です(v.1,v.13)。

神との親密な関係がそこにはあって、神は御自分の救済史の計画(秘められた計画/コロ 1:26)を彼に明らかにされます(v.10)。そのような方として神はアブラハムに顕現されました。

v.3 「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。」

この部分は以前の口語訳聖書では、「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、・・・」となっていて、このほうが原文に近い翻訳です。これは私たちが主日のミサで、父・子・聖霊なる神との間に持つ交わりと通じるものです。共にミサをささげるために集まった私たちのところに、父・子・聖霊なる神が訪れて来られます。

「父と子と聖霊のみ名によって。」「アーメン。」

「主は皆さんとともに。」「また司祭とともに。」

### 2. ルカ

マルタとマリアの話は、その兄弟ラザロを含めて、それぞれ別々の切り口で各福音書に登場して来ます。ルカ福音書ではいろいろのもてなしのためにせわしく立ち働くマルタと、主の足もとに座って御言葉に聞き入っていたマリアとが対比されています。そして結論が述べられます。

v.42 「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアはよい方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

このv.42が、当時の教会の会衆への呼びかけであることは間違いありませんが、それはまた現代の教会で主日のミサに集まって来ている私たちへの呼びかけでもあるのです。

「必要なことはただ一つ」、それは“聞くこと”である、と説明されて来ました。そして宗教改革以来のプロテスタント陣営では、特別に説教が重視されて来ました。“主日にはカトリックの信者はミサ(狭い意味での感謝の典礼)に行き、プロテスタントの信者は説教を聞きに行く”と、久しく言われていました。

第二バチカン公会議後の典礼刷新で、カトリック教会でも“ことばの典礼”が重んじられるようになり、日本語の聖書の朗読と共に説教が行われるようになりました。

それではこの“聞く”もの、私たちが“聞くべき”ものとは何なのでしょう。残念ながらこの点で、20世紀のプロテスタント教会の説教は殆ど良い前例を残してはくれませんでした。プロテスタントの会衆はイエスについての“よもやま話”や、イエスの名を借りての“良いお話”などというレベルのもので、お茶を濁されて来たのではなかったのかとの危惧を、感じざるを得ないのです。

### 3. コロ

使徒パウロは、自分は「御言葉」を伝える務めを神から与えられたと述べています(v.25)。それは実際に聖書を読んでも分るように、ナザレのイエスがかつて語られた“あの言葉この言葉”を指していたのではありません。そうではなくて、「秘められた計画(4:3では“キリストの秘められた計画”）」を宣べ伝えることであります。それは「十字架の言葉」(I コリ 1:18)であり、「キリストの言葉」(ロマ 10:17)、すなわち「御子に関する福音」(ロマ 1:2-3)であります。使徒パウロはこれを、「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです」と述べています(ロマ 10:8)。

第二バチカン公会議の公文書である典礼憲章は、これを実に見事に、「聖書に基づいて、信仰の秘義とキリスト教生活の諸原則を説明する説教」(52)と言い当てています。

カトリック教会のミサで司祭が説教するようになってまだ30年ほどにしかありませんが、恐らくそれは実際には、個々の司祭による手探りと試行錯誤の30年であったのだらうと思います。それは20世紀の教会のありのままの姿を写し出す鏡であったのかもしれませんが、個々の司祭の能力や努力の問題ではなくて、20世紀のキリスト教会を覆っていた「顔覆い」(II コリ 3:12-18)が取り除かれていないための結果だったのではないのでしょうか。

“それはキリストにおいて取り除かれる”(II コリ 3:16)と、使徒パウロは述べています。「キリストの秘められた計画」が、説教のみならずミサ全体を通して明らかにされるために、私たちの司祭と共に会衆一同も労苦し闘う(2:1)ことは、21世紀の教会の課題なのです。

「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアはよい方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(ルカ 10:42)

21世紀の私たちの教会は、主から「キリストの秘められた計画」を聞くことを“選んだ”と言っていただけになることを、期待されているのです。ご一緒に真剣に祈り求めて行きましょう。

アーメン、ハレルヤ。



## 7月29日 年間第17主日

創 18:20～32    コロ 2:12～14    ルカ 11:1～13

“主の祈り”は、私たちのミサの“感謝の典礼”の中で、奉献文に添える形で会衆一同で祈ります。この習慣の起源は4世紀頃からのようで、「キリスト信者にとっては聖体のパンも暗示されている日々の糧を求め」(ミサ典礼書の総則56イ)、拝領によって私たちが一つになる心構えをさせるのです。

このような背景のもとで、私たちは今朝のルカ福音書のテキストを考えてみましょう。

### 1. ルカ

ルカ福音書はこの物語りの中で、二つのことを強調しています。その第一は、「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」(v.9)であり、第二は「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(v.13)であります。“主の祈り”は、父なる神に向かって熱心に求める祈りでなければならないと、この物語りは語っているように見えます。そして熱心に祈るなら、天の父は聖霊を与えてくださるというのです。

「しつように頼めば、……何でも与えるであろう」(v.8)は、19世紀以来特にプロテスタントの一部の教派で、“人間の熱心によって、神を動かすことが出来る”というふうに誤って理解されて来ました。しかし、与えてくださるのは天の父であることを、そして私たちに求められているのは真実な祈りをささげることであることを、忘れてはなりません。祈った後、私たちは天の父の御手に委ねて沈黙せねばなりません。

「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」(12:32)

「しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」(ハバ2:20)

### 2.

奉献文はいつも栄唱で結ばれます。

司祭：「キリストによってキリストとともにキリストのうちに、聖霊の交わりの中で、全能の神、父である  
あなたに、」

会衆：「すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、アーメン。」

これも3～4世紀の教会に起源する古典的な祈りの定式によるものです。その中の「聖霊の交わりの中で……」は、「祭儀全体の中心であり頂点である感謝の祈り(奉献文)」(ミサ典礼書の総則54)を貫いているものであることに注目しましょう。

奉献文の中で聖霊の働きを求める祈りの部分のことを“エピクレーシス”と呼んでいますが、具体的には二つあって、前者は感謝の賛歌の直ぐ後に司祭が唱える「聖霊によってこの供えものを……。主イエス・キリストの御からだと御血になりますように」です。後者は記念唱の後に司祭が唱える「キリストの御からだと御血にとともにあずかるわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれますように」です。今朝のルカ福音

書の v.13 は、私たちにこのエピクレーシスのことを想起させます。恐らく代々の教会はこの v.13 をそのようなものとして聞いて来たのではないのでしょうか。

### 3. 創

イスラエルの父祖アブラハムは、ソドムの町とそこに住むロト一族のために神にとりなしました。この物語りの中でアブラハムは神の憐れみに訴えて、ソドムを滅びから救う正しい人の人数を最初の 50 人から徐々に 10 人にまで “値切る” のです。しかしその後の物語りは、その 10 人さえもがいなくて、町が滅ぼされるという話になっています。

この物語りは南王国の伝承である J という資料から取られたもので、神の民であるはずの南(ユダ)王国の罪のために、「ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった」(歴下 36:16) と記されている紀元前 587 年のエルサレム陥落という歴史の教訓が影響しているのかもしれませんが。

創世記が語っているこのような人間の罪の現実というものを解決してくださったのが、私たちの主イエス・キリストなのです。

### 4. コロ

v.13 「罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださったのです。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、……」

“主の祈り” は、このキリストのいけにえが記念される “感謝の典礼” にふさわしいのです。「それは、いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずなであり、キリストが食され、心は恩恵に満たされ、未来の栄光の保証がわれわれに与えられる復活の祝宴である。」(典礼憲章 47)

熱心に祈る私たち会衆一同に、天の父は聖霊を与えて、私たちに「からだの復活、永遠のいのち」(信仰宣言) を保証してください。 アーメン、ハレルヤ。